

Title	外国語教育における三つの資質・能力とパフォーマンス評価：慶應義塾大学外国語教育研究センター研究プロジェクト「グローバル化に対応した外国語教育推進事業」
Sub Title	Investigating the three competencies and performance-based assessment in foreign language education : "Foreign language education project to foster the competencies required in a globalized society", conducted by the Keio Research Center for Foreign Language Education
Author	山下, 一夫(Yamashita, Kazuo) 山下, 誠(Yamashita, Makoto) 吉川, 龍生(Yoshikawa, Tatsuo)
Publisher	慶應義塾大学外国語教育研究センター
Publication year	2021
Jtitle	慶應義塾外国語教育研究 (Journal of foreign language education). Vol.17, (2020.) ,p.175- 200
JaLC DOI	
Abstract	In FY 2020, the Keio Research Center for Foreign Language Education, in cooperation with junior high schools and high schools in Kanagawa Prefecture, conducted a "Foreign Language Education Project to Foster the Competencies Required in a Globalized Society" to research methods of foreign language education consistent with the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology's the Course of Study (amended 2018). The Course of Study focuses on the three competencies (knowledge and skills-related competencies, thinking ability, and motivation to learn), coverage of receptive and production skills, and the use of methods that promote deep learning. Through Backward Design principles, a curriculum consistent with the Guidelines was designed. The curriculum included one-year teaching objectives and teaching objectives for the three competencies. Performance tasks and performance evaluation rubrics were designed for each unit. The researchers created a format for the input of the above information to facilitate the design of teaching plans with the stated characteristics. The seven educators participating in the project produced lesson plans based on the above framework for lessons in Korean, Spanish, Chinese, German and French. Lessons incorporating the performance tasks were then provided.
Notes	調査・実践報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12043414-20200000-0175

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

外国語教育における 三つの資質・能力とパフォーマンス評価

—慶應義塾大学外国語教育研究センター研究プロジェクト
「グローバル化に対応した外国語教育推進事業」

山 下 一 夫
山 下 誠
吉 川 龍 生

Abstract

In FY 2020, the Keio Research Center for Foreign Language Education, in cooperation with junior high schools and high schools in Kanagawa Prefecture, conducted a “Foreign Language Education Project to Foster the Competencies Required in a Globalized Society” to research methods of foreign language education consistent with the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology’s the Course of Study (amended 2018). The Course of Study focuses on the three competencies (knowledge and skills-related competencies, thinking ability, and motivation to learn), coverage of receptive and production skills, and the use of methods that promote deep learning. Through Backward Design principles, a curriculum consistent with the Guidelines was designed. The curriculum included one-year teaching objectives and teaching objectives for the three competencies. Performance tasks and performance evaluation rubrics were designed for each unit. The researchers created a format for the input of the above information to facilitate the design of teaching plans with the stated characteristics. The seven educators participating in the project produced lesson plans based on the above framework for lessons in Korean, Spanish, Chinese, German and French. Lessons incorporating the performance tasks were then provided.

1. はじめに

文部科学省では、「これからの大学教育等の在り方について(教育再生実行会議第三次提言)」(平成25年5月28日)ⁱ、「第2期教育振興基本計画」(平成25年6月14日)ⁱⁱ、「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」(平成25年12月13日)ⁱⁱⁱ、「英語教育の在り方に関する有識者会議」(平成26年9月26日)^{iv}等で示された英語教育強化の提言を受け、平成27(2015)年度から以下のような「英語教育強化推進事業」を開始した^v。

小学校における英語教育の適切な開始年次や授業時数の在り方、小学校から中学校及び中学校から高等学校への円滑な移行のための方策、中学校・高等学校における英語教育の目標・内容の高度化を図る等、小学校、中学校、高等学校及び中等教育学校における英語教育に関する教育課程等の改善に資する実証的資料を得るため、特定の地域を「英語教育強化地域拠点」として指定し、研究開発事業(以下「本事業」という。)を実施する。…(略)…申請者は、都道府県及び政令指定都市の教育委員会、附属小学校を置く国立大学法人及び学校法人とする。

ここで志向されたのは、あくまでも英語に限った外国語教育の強化であったが、平成28年の中央教育審議会の答申において、下記のような「英語以外の外国語教育の改善・充実」という項目が加わった^{vi}。

グローバル化が進展する中、日本の子供たちや若者に多様な外国語を学ぶ機会を提供することは、言語やその背景にある文化の多様性を尊重することにつながるため、英語以外の外国語教育の必要性を更に明確にすることが必要である。また、学習指導要領の改訂に向けて、外国語教育における領域別の目標を設定して作成するカリキュラムの研究や研修、教材開発などの取組について支援することが求められる。

この提言を元として、平成29(2017)年度に「英語以外の外国語教育」の事業化が、「外国語強化地域拠点事業」と名称変更された「英語教育強化推進事業」に間借りする形で実現した。この事業化には、文部科学省に対するJACTFL(一般社団法人日本外国語教育推進機構)をはじめ、英語以外のさまざまな言語の学会や研究会から提言が出されたことも少なからず影響していると考えられる^{vii}。また、それまでのほとんどの拠点事業で受託先となっていた自治体の教育委員会では申請が難しい側面もあったため、JACTFLやTJF(公益財団法人国際文化フォーラム)の働きかけもあって慶應義塾大学を含む3大学が応募し、事業委託を受けて研究を行った。翌平成30(2018)年度は、「外国語強化地域拠点事業」は終了したものの、「英語以

外の外国語教育」部分が「グローバル化に対応した外国語教育推進事業」としてスキームを変更して継続となり、慶應義塾大学も平成31（2019）年度（令和元年度）まで2年間事業委託を受けた。続く令和2（2020）年度も、当初は事業継続が通知されたが、COVID-19の流行によって文部科学省が事業を中止した。しかし慶應義塾大学が事業委託を検討していた部分については、研究活動の持続可能性に鑑み、外国語教育研究センター独自の研究プロジェクトとして事業を引き継いだ。

こうして慶應義塾大学で合計4年間実施した研究事業は、韓国・朝鮮語、スペイン語、中国語、ドイツ語、フランス語の、「英語以外の外国語」科目を有する幾つかの神奈川県、東京都の中学校・高等学校を研究拠点校、当該科目を担当する教員を研究担当者とし、これと協働で授業の設計・検討にあたる大学の研究者・高等学校教員・教育関連団体役員を運営指導委員とし、さらに以後の研究の拡大も見据えてオブザーバーである拡大プロジェクトメンバーも加えた上で、慶應義塾大学外国語教育研究センターがこれらのメンバーが集まる、いわば「受け皿」になって進められた。当該事業は、年度によって入れ替わりがあったが、令和2（2020）年度の構成員は以下の通りであった。

研究担当者

所属	氏名	言語（担当分野）
神奈川県立横浜翠嵐高等学校（定時制の課程）／講師	遠藤 正承	韓国・朝鮮語、地歴・公民
東京都立青梅総合高等学校／講師	石黒みのり	韓国・朝鮮語
東京都立王子総合高等学校／講師	高島 理恵	スペイン語
横浜市立みなと総合高等学校／講師	温 悠	中国語、日本語
慶應義塾高等学校／教諭	吉村 創	ドイツ語、英語
横浜市立みなと総合高等学校／講師	池谷 尚美	ドイツ語
カリタス女子中学高等学校／教諭	Barbara BAUDE	フランス語

運営指導委員

大学		
所属	氏名	言語（担当分野）
慶應義塾大学／教授	山下 一夫	中国語 ※研究主任
慶應義塾大学／教授	吉川 龍生	中国語
慶應義塾大学／教授	境 一三	ドイツ語
慶應義塾大学／助教	縣 由衣子	フランス語、英語

中学校・高等学校		
所属	氏名	言語（担当分野）
神奈川県立光陵高等学校／教諭	辻 祐哉	英語
高等学校韓国朝鮮語教育ネットワーク／元代表 神奈川県立岸根高等学校／教諭	山下 誠	韓国・朝鮮語、地歴・公民
神奈川県立深沢高等学校／教諭	日比野規生	スペイン語、英語
神奈川県立藤沢高等学校／教諭	潮田 央	中国語、国語
カリタス女子中学高等学校／教諭	櫻木 千尋	フランス語
教育関連団体		
所属	氏名	言語（担当分野）
（公財）国際文化フォーラム／常務理事	水口 景子	外国語教育、国際交流

拡大プロジェクトメンバー

所属	氏名	言語（担当分野）
横浜市立みなと総合高等学校／講師	ジョン・ヨンジュ （鄭 軟妹）	韓国・朝鮮語
東京都立王子総合高等学校／講師 神奈川県立秦野総合高等学校／講師	チョン・ヒョンヒ （鄭 賢熙）	韓国・朝鮮語
秋田県立能代松陽高等学校／教諭	原田智津子	韓国・朝鮮語
東京都立第五商業高等学校／講師	リュ・ホスン （柳 虎順）	韓国・朝鮮語
埼玉県立伊奈学園総合高等学校／教諭	鈴木 冴子	ドイツ語、英語
慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科博士課程 カリタス女子中学高等学校／課外講師	松木 瑤子	フランス語

上記のように、様々な所属・担当言語の教員が構成員となり、文科省委託事業として行ったことで、本研究は以下のような性質を獲得することとなった。

- (1) 多言語連携。様々な言語関係者が協働することで、個別言語の枠を超え、外国語教育の普遍的な目標と方法が志向された。
- (2) 高大協働。同じく外国語教育に従事しながら、一般にはあまり交流が無い中等教育の教員と高等教育の教員が、それぞれの持つ情報を交換し、知的交流を行うことで、今

までに無い形での研究が進められた。

- (3) 新学習指導要領の「外国語」における位置づけ。新学習指導要領の分析と検証を行ったことで、従来はとかく「その他」「付け足し」のように扱われがちだった「英語以外の外国語教育」を、中等教育の文脈に明示的に位置づけ、「複言語主義による豊かな外国語教育の実現」が目指された。

本稿では、上記の経緯で令和2（2020）年度に実施した慶應義塾大学外国語教育研究センター「グローバル化に対応した外国語教育推進事業」について、その前身にあたる平成29（2017）年度「外国語強化地域拠点事業」、平成30（2018）年度・平成31（2019）年度「グローバル化に対応した外国語教育推進事業」も参照・言及しつつ^{viii}、その成果について報告を行い、問題提起を行うものである。

2. 育成すべき資質・能力の三つの柱

平成29（2017）年度に告示された、いわゆる新学習指導要領は、移行措置実施期間を経て、中学校は令和3（2021）年度、高等学校は令和4（2022）年度から順次実施されることになっている。そこで説かれている内容で、我々が特に重視したのが、「育成すべき資質・能力の三つの柱」である。これは、高等学校新学習指導要領の第1章第1款「高等学校教育の基本と教育課程の役割」で、「2 学校の教育活動を進めるに当たっては…」の項目の後に、以下のよう^{ix}に記されている。

2の(1)から(3)までに掲げる事項の実現を図り、豊かな創造性を備え持続可能な社会の創り手となることが期待される生徒に、生きる力を育むことを目指すに当たっては、学校教育全体及び各教科・科目等の指導を通してどのような資質・能力の育成を目指すのかを明確にしなが^ら、教育活動の充実を図るものとする。その際、生徒の発達の段階や特性等を踏まえつつ、次に掲げることが偏りなく実現できるようにするものとする。

- (1) 知識及び技能が習得されるようにすること。
- (2) 思考力、判断力、表現力等を育成すること。
- (3) 学びに向かう力、人間性等を涵養すること。

この中で、(3)の「学びに向かう力、人間性」は、改訂前の学習指導要領が「知識の体系」を志向し、「内容の習得」を最優先の課題としたことと比べると、表現としても、内容としても斬新に感じられる一方、(1)の「知識及び技能」や(2)の「思考力、判断力、表現力」は、改訂前の学習指導要領における「内容の習得」と変わらないように思われるかも知れない^x。

しかし例えば具体的な教科の説明文である第4章第2款「各学校において定める目標及び内容」で以下のように述べられている^{xi}。

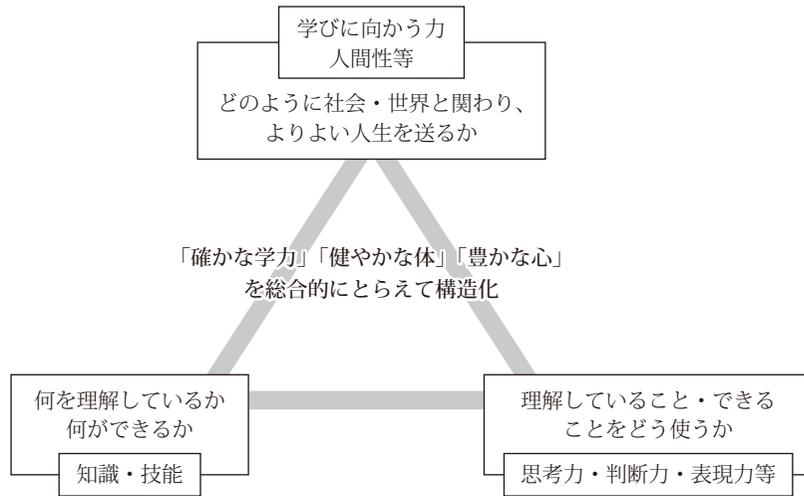
探究課題の解決を通して育成を目指す具体的な資質・能力については、次の事項に配慮すること。

- ア 知識及び技能については、他教科等及び総合的な探究の時間で習得する知識及び技能が相互に関連付けられ、社会の中で生きて働くものとして形成されるようにすること。
- イ 思考力、判断力、表現力等については、課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現などの探究の過程において発揮され、未知の状況において活用できるものとして身に付けられるようにすること。
- ウ 学びに向かう力、人間性等については、自分自身に関すること及び他者や社会との関わりに関することの両方の視点を踏まえること。

上記資料で、「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力」は、単に「内容の習得」をすればよいのではなく、前者は「社会の中で生きて働くもの」、後者は「未知の状況において活用できるもの」と定義されている。これの元となったのは、平成28年6月21日付の「教育課程部会総則・評価特別部会資料」の「学習指導要領改訂の方向性（案）」で示された、上記(1)～(3)それぞれについての以下の説明である^{xii}。

- ・生きて働く知識・技能の習得
- ・未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等の育成
- ・学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性等の涵養

さらに同資料では、この「三つの柱」が以下の様に図示されている^{xiii}。



育成すべき資質・能力の三つの柱（案）

以上の資料に基づくと、まず(1)「知識及び技能」は、「何を理解しているか、何ができるか」が、「相互に関連付けられ、社会の中で生きて働くものとして形成されるようにする」べきもの、ということになる。これは、中教審の検討の初期段階では「個別の知識・技能」という表現だったが、知識はバラバラではなく、総合してはじめて使えるようになるという側面があるため、そうした形での習得を最初から目指すべきだという提言を受けて、この表現に変更されたという経緯がある^{xiv}。外国語学習で言えば、単語や文法を覚えるのに単体で暗記するのではなく、組み合わせて使うことを前提に覚える、ということになる。

次に(2)「思考力、判断力、表現力」は、「理解していること・できることをどう使うか」が、「未知の状況にも対応できる」「未知の状況において活用できるものとして身につけられるようにする」べきもの、ということになる。これは、従来なら例えば、型に嵌まった表現でも英語で話すことができれば良い、という考えもあったかも知れないが、そこから一歩踏み出して思考・判断し、様々な状況に対応して表現する力を養っていくことが目指されている。

そして(3)「学びに向かう力・人間性」は、「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」であり、「人生や社会に生かそうとする」のが学びの究極の目的、ということになる。

新学習指導要領の各教科の目標や内容も、上記の「育成すべき資質・能力の三つの柱」に即した記述が成されている^{xv}。以下に挙げるのは、教育出版が公表している「中学校外国語学習指導要領新旧対照表」であるが^{xvi}、「備考」欄を読むと「育成すべき資質・能力の三つの柱」と対応していることが分かる。

現行（平成20年告示／平成27年道徳改訂版）	新（平成29年告示）	備考
<p>第1 目標</p> <p>外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。</p>	<p>第1 目標</p> <p>外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を次のとおり育成することを目指す。</p> <p>(1) 外国語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどを理解するとともに、これらの知識を、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けるようにする。</p> <p>(2) コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、日常的な話題や社会的な話題について、外国語で簡単な情報や考えなどを理解したり、これらを活用して表現したり伝え合ったりすることができる力を養う。</p> <p>(3) 外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。</p>	<p>・目標が、「資質・能力の三つの柱」に対応するかたちで整理して示されている。</p> <p>・「知識・技能」に対応。</p> <p>・「思考力・判断力・表現力等」に対応。</p> <p>・「学びに向かう力・人間性等」に対応。</p>

上の形式を借りて、高等学校外国語学習指導要領の記述と「育成すべき資質・能力の三つの柱」の対応を示すと以下の通りになる^{xvii}。

高等学校学習指導要領・外国語	対応する「育成すべき資質・能力の三つの柱」
<p>第8節 外国語 第1款 目標</p> <p>外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動及びこれらをつなげた統合的な言語活動を通して、情報や考えなどを的確に理解したり適切に表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を次のとおり育成することを目指す。</p> <p>(1) 外国語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどの理解を深めるとともに、これらの知識を、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて、目的や場面、状況などに応じて適切に活用できる技能を身に付けるようにする。</p> <p>(2) コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、日常的な話題や社会的な話題について、外国語で情報や考えなどの概要や要点、詳細、話し手や書き手の意図などを的確に理解したり、これらを活用して適切に表現したり伝え合ったりすることができる力を養う。</p> <p>(3) 外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的、自律的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・目標が、「資質・能力の三つの柱」に対応するかたちで整理して示されている。 ・「知識・技能」に対応。 ・「思考力・判断力・表現力等」に対応。 ・「学びに向かう力・人間性等」に対応。

こうした対応は、外国語だけではなく、他のすべての教科についても当てはまる。例として、高等学校の家庭科の記述を見ると、以下の通りとなる。

高等学校学習指導要領・課程	対応する「育成すべき資質・能力の三つの柱」
<p>第9節 家庭 第1款 目標</p> <p>生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、実践的・体験的な学習活動を通して、様々な人々と協働し、よりよい社会の構築に向けて、男女が協力して主体的に家庭や地域の生活を創造する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。</p> <p>(1) 人間の生涯にわたる発達と生活の営みを総合的に捉え、家族・家庭の意義、家族・家庭と社会との関わりについて理解を深め、家族・家庭、衣食住、消費や環境などについて、生活を主体的に営むために必要な理解を図るとともに、それらに係る技能を身に付けるようにする。</p> <p>(2) 家庭や地域及び社会における生活の中から問題を見いだして課題を設定し、解決策を構想し、実践を評価・改善し、考察したことを根拠に基づいて論理的に表現するなど、生涯を見通して生活の課題を解決する力を養う。</p> <p>(3) 様々な人々と協働し、よりよい社会の構築に向けて、地域社会に参画しようとするとともに、自分や家庭、地域の生活を主体的に創造しようとする実践的な態度を養う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・目標が、「資質・能力の三つの柱」に対応するかたちで整理して示されている。 ・「知識・技能」に対応。 ・「思考力・判断力・表現力等」に対応。 ・「学びに向かう力・人間性等」に対応。

3. 単元指導案

上記の「育成すべき資質・能力の三つの柱」のほか、我々は新学習指導要領の以下の二点にも注目した。

- (1) 従来「聞くこと」「読むこと」「書くこと」「話すこと」の「四技能」から、新学習指導要領で示された「聞くこと」「読むこと」「書くこと」「話すこと（やり取り）」「話すこと（発表）」の「五領域」への転換。
- (2) 学びの方法・授業づくりの方法としての「主体的、対話的で深い学び」。なおこれは、学習指導要領公示前の段階では「アクティブ・ラーニング」と称されていたものである。

我々の研究は、こうした新学習指導要領で提示された内容を検証し、どのように授業目標を設定し、実践に落とし込むかを考えていくこととなった。そのために採用した、到達度を測るための具体的な手立てが「パフォーマンス評価」である。これは、「リアルな文脈（あるいはシミュレーションの文脈）において、知識やスキルを総合して使いこなすことを求めるような課題」^{xviii}として定義される「パフォーマンス課題」を実施し、ルーブリックを使ってその評価を行う、というものである。

また、正しい評価を行うための理論的なカリキュラム設計を提唱したG・ウィギンズおよびJ・マクタイの議論も参照しながら^{xix}、「ゴール」から逆算して授業を組み立てる「逆向き設計」（バックワードデザイン）に基づき、単元目標や年間目標を設定するという方法を採用した。これは本事業に先立って出版された『外国語学習のめやす 高等学校の中国語と韓国語教育からの提言』^{xx}でも推奨されており、これを新学習指導要領の内容と比較検討した結果、両者の整合性が確認されたことも理由となっている。こうしたことをふまえ、本事業では「単元指導様式」の設計を行った。これは、以下のように最初に「実施するクラスの状況等」の項目があった後、「年間の目標」と「単元の目標」を中心に構成されるフォーマットである。

実施するクラスの状況等

言語／科目名		実施時期	
学習年次		言語レベル	
クラスの状況		単元の授業時数 (50分×3回など)	
単位数		使用教材	

年間の目標

年間目標		
1年を通して育むべき資質・能力		
① 生きて働く知識・技能の習得	② 未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力の育成	③ 学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性の涵養
(音声、文字、語彙、表現、文法、言語の働きなどの細目を記述)		

単元の目標

単元目標		
この単元で設定するパフォーマンス課題		
この単元で育むべき資質・能力（年間目標のうち、本単元で焦点化、重点化するもの）		
① 生きて働く知識・技能の習得	② 未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力の育成	③ 学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性の涵養
(この単元で参照する既習事項)		

このフォーマットは、上段に「年間目標」と、それを「育成すべき資質・能力の三つの柱」にブレイクダウンした内容を記述し、また下段に「単元目標」とそこで行う「パフォーマンス課題」、そしてそれを「育成すべき資質・能力の三つの柱」でブレイクダウンした内容を記述する、という構造になっている。授業担当者は、まず単元指導案を作成し、「育成すべき資質・能力の三つの柱」を授業計画に落とし込んだ上で、「五領域」を念頭に置いたパフォーマンス課題を実施し、評価を行うのである。

こうした設定は、事業の当初からすんなり実行できていたわけではない。様々な試行錯誤を重ねながら、「実践」→「検証」→「改善」→「実践」→…といったPDCA (Plan-Do-Check-Act) サイクルで進み、段々と作り上げていったものである。

まず、初年度の平成29 (2017) 年度「外国語強化地域拠点事業」では、事業自体が年度半ば頃からの開始だったこともあり、すでに実施が決まっていた一単元分を単元指導案に落とし込むことから始めた。そしてパフォーマンス課題をルーブリックで評価することで、従前の実践と本指導案様式との接続性の確認を行った。しかし、Can-Do リストや評価方法など含め、オールインワンで授業設計ができるような仕組みを考えたため、単一のフォーマットで全体を俯瞰できるという利点はあったが、多くの要素を盛り込みすぎていたり、一つ一つの概念を深められていなかったりといった問題もあった。

2年目の平成30 (2018) 年度「グローバル化に対応した外国語教育推進事業」では、年度当初からの取組みが可能だったため、年間の中の複数の単元でパフォーマンス課題を設定し、そこで新学習指導要領における「育成すべき資質・能力の三つの柱」をどのように連結させるかの議論を重ねて行った。

3年目となる平成31 (2019) 年度「グローバル化に対応した外国語教育推進事業」では、年間目標の設定について、バックワードデザインと、そのキーコンセプトとなる「本質的な問い」と「永続的理解」の問題を研究した。両者の単元指導案様式への反映については、現在保留状態にあるが、本研究の意義づけと方向性の明確化に寄与したという点で、大きな意味があったと考えている。

4年目となった令和2 (2020) 年度の慶應義塾大学外国語教育研究センター「グローバル化に対応した外国語教育推進事業」は、こうした蓄積の上に行った研究である。そこでは、まず新学習指導要領の「育成すべき資質・能力の三つの柱」をどのように実践に落とし込むかについて再検討を行い、これを単元指導案の単元目標・年間目標と比較することで、その妥当性について分析を進めた。ここで問題となったのが、「思考力・判断力・表現力等」と「学びに向かう力・人間性等」である。外国語科目の場合、「知識・技能」については、一般にその内容を具体的に思い浮かべやすいが、この二つについてはなかなか分かりづらいという側面もある。

例えば前章で検討した家庭科であれば、「思考力・判断力・表現力等」として「家庭や地域及び社会における生活の中から問題を見いだす課題を行い、そこから養われる「自分や家庭、地域の生活を主体的に創造しようとする実践的な態度」が「学びに向かう力・人間性等」になるというように、具体的な授業内容を想定しやすい。これは国語や公民、地理・歴史などもそうで、「思考力・判断力・表現力等」と「学びに向かう力・人間性等」はこれら一般科目と親和性が高い。しかしそれでもこの二つを外国語科目で実現する方法を模索したことで、従来持ち得なかった視点を獲得することができた。そしてそうした基礎の上に、逆向き設計デザインの発想から、「年間目標」と「単元目標」、「単元目標」と「パフォーマンス課題」との間の有機的な連関について研究を行った。

4. 年間目標・単元目標・パフォーマンス評価

さて、年間目標・単元目標・パフォーマンス評価の三者の連関について、以下、神奈川県立翠嵐高等学校（定時制の課程）の韓国・朝鮮語の授業（担当：遠藤正承）を例として検討してみたい^{xxi}。まず、授業担当者が作成した年間目標はこのようなものであった。

- ・授業を通して韓国語や韓国文化に関心を深めることができるようにする。
- ・自己紹介、買い物、食事、趣味等身近な場面において、同年代の韓国語母語話者と一言でもよいので韓国語でやりとりできるようにする。
- ・韓国語にとどまらず、自身の母語や方言、日本語にも関心を持てるようにする。

上記の年間目標の下で実施された年間の各単元は以下の通りである^{xxii}。

時期	単元名	パフォーマンス課題
4月	-----	
5月	韓国語とは（プリント課題による自学）	
6月	韓国語に慣れよう（プリント、YouTube）	
7月	韓国語の音声でしゃべろう。	自己紹介（定型文に沿って）。
9月	何をしますか。何をしましたか。	
10月	好きなものは何かを表現しよう。	好きな食べもの等を紹介する。
11月	ルーツの国、地方の言語を紹介しよう。	
12月	ルーツの国、地方の言語を紹介しよう。	好きなことばを3つ紹介する（定型文に沿って）
1月	したいこと、ものを表現しよう。	

上の中で、11月・12月が「ルーツの国、地方の言語を紹介しよう。」という単元になっており、そこでは以下のような単元目標を設定している。

- (1) 生徒自ら課題「ルーツの言語・方言を紹介しよう」にとりくみ、既習の文法項目や定型文、語彙を使いながら文を作ることができる。
- (2) 大きな声やジェスチャー、絵や写真等視覚に訴えるものを使用し、他の生徒にわかるよう発表することができる。
- (3) 他の生徒の発表内容を聞き、理解することができるようにする。
- (4) 韓国語や日本語のほか、これら以外の言語や方言について関心を拡大することができるようにする。

この単元目標を年間目標と比較すると、以下のようにそれぞれ表現が対応しており、前者の要素が後者の中に散りばめられている。年間目標を実現するために個々の単元目標が設定され、また逆に個々の単元目標が抽象化されることで年間目標になっているというように、両者は有機的な関連がある。

年間目標（全体）	単元目標（全体）
韓国語や韓国文化に関心を深める	韓国語…(略)…について関心を拡大する
自己紹介	ルーツの言語・方言を紹介
同年代の韓国語母語話者と一言でもよいので韓国語でやりとりできる	他の生徒にわかるよう発表する 他の生徒の発表内容を聞き、理解する
自身の母語や方言、日本語にも関心を持てる	日本語のほか、これら以外の言語や方言について関心を拡大する

そして、「ルーツの国、地方の言語を紹介しよう。」の単元で実施するのが、「好きなことばを3つ紹介する（定型文に沿って）」というパフォーマンス課題である。これは、学習者が自分のルーツとなる言語・方言で使われる言葉を3つ選び、定型文に当てはめて発表を行うというものである。当該授業で実際に行われた例として、鹿児島県出水方言の「もじよか」「ぐらしか」「ぬっか」を選び、定型文に当てはめたダイアログを以下に示す。

Q：안녕하세요？

A：안녕하세요？

Q：그런데 고향이 어디예요？

A：(가고시마) 예요.

Q : 그림 좋아하는 (가고시마 방언) 세 개 소개해 주세요.

A : (もじよか) 하고 (ぐらしか) 하고 (ぬっか) 예요.

Q : 그들은 한국어로 뭐라고 해요?

A : (もじよか)는 (예뻐요)이고 (ぐらしか)는 (불쌍해요)이고 (ぬっか)는 (따뜻해요)예요.

Q : 와, 재미있다!

A : 감사합니다.

Q : 감사합니다.

Q : こんにちは?

A : こんにちは?

Q :ところで故郷はどこですか?

A : (鹿児島) です.

Q :では, すきな (鹿児島方言) 三つ紹介してください.

A : (もじよか) と (ぐらしか) と (ぬっか) です.

Q :それらは韓国語で何といいますか?

A : (もじよか) は (예뻐요)、(ぐらしか) は (불쌍해요)、(ぬっか) は (따뜻해요) です.

Q :わあ, おもしろい!

A :ありがとうございます.

Q :ありがとうございます.

なお、このパフォーマンス課題を行う授業は、以下のような構成で実施された^{xxiii}。

	内容	活動・留意点	評価方法
導入	<ul style="list-style-type: none"> 出欠点呼 「안니ョン하세요」「판가브스무니다」等、挨拶ことば、定型句を発声練習。 今日行なうことを確認。 	<ul style="list-style-type: none"> コーラスリーディング 教員は「ゆっくり、大きな声で」を指示 	<ul style="list-style-type: none"> 声が出ているか。
展開	<ul style="list-style-type: none"> 二人一組、ロールプレイ形式で発表。 発表終了後、各言語(方言)のことばを再度紹介し練習する。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒はボードを提示しながら好きなことば・紹介したいことばについて発表。 聴者の生徒は発表を聴きながらメモする。 	<ul style="list-style-type: none"> 聴者に聞かせようとしているか。 理解し、メモできているか。
まとめ	ワークシート完成	ルーブリックによる。	<ul style="list-style-type: none"> 的確に自分の発表をふりかえっているか。 他の生徒の発表をよく聴き記しているか。

このパフォーマンス課題は、他の授業内容と関係の無い単発のイベントとして行ったわけではなく、11月・12月の単元で設定した目標の到達度を測るために実施したものである。すなわち、パフォーマンス課題を含む具体的な授業活動によって単元目標が達成され、個々の単元目標が達成されることで年間目標が達成される構造になっていると同時に、年間目標を達成するために個々の単元目標が設定され、単元目標を達成するためにパフォーマンス課題を実施するという関係になっている。年間目標・単元目標・パフォーマンス評価の三者は有機的に連関しており、授業担当者は具体的な活動の抽象化と、抽象的な目標の具体化の双方向で、この三者の間を行き来する思考が求められる。こうした設計によって、逆向き設計による授業計画を実現することができるのである。

なお、上の「まとめ」で触れられているワークシートとは以下のようなものである。

() 학년 () 반, 이름 name ()

ルーツの国（地方）の言語（方言）を紹介しよう！ワークシート

2020년 12월 18일 (금)

「目標設定＝評価のためのルーブリック」は別紙をみながらこたえてください。

なまえ (カタカナでよい)	発表者が紹介したその言語や方言の語を3個。(ひらがな、英文字、拼音で書いてもよい。) ・発表への感想一言 ・言語（方言）への感想一言	目標設定＝評価のためのルーブリック				
			5	4	2	1
1	① ② ③ ・発表へ一言 ・言語（方言）へ一言	A				
		B				
		C				
		D				
		E				
		F				

生徒は事前に配布されたこのワークシートに、発表で紹介された言語・方言や単語、感想などを記入した上で、別紙で示されたルーブリックを使って発表への評価を行う。これは教員からの一方的な知識伝達ではなく、「主体的・対話的で深い学び」を促すための仕組みの一つであるといえる。なお、別紙で示すルーブリックは以下の通りで、「五領域」のうち「話すこと（発表）」が意識されている。

	5 目標以上達成	4 目標達成	2 もうすこしがんばろう	1 努力が必要
A 見る人に伝える	見る人に伝えようと思って、自然に語りかける	見る人に伝えようと思って、一生懸命語りかける	見る人をほとんど意識できない	見る人をほとんど意識できない
B スムーズに	ぜんぜんつかえない	ほとんどつかえない	ときどきつかえる	よくつかえる
C はっきりと	とてもはっきり	はっきり	はっきりだったりぼそぼそだったり	ぼそぼそ
D 内容のわかりやすさ	相手にわかるよう工夫がみられる	だいたいわかる	ところどころわかりづらいところがある	内容がわかりづらく工夫が必要である
E 関心の拡大	おおいに関心をもった	だいたい関心をもった	あまり関心をもたなかった	まったく関心をもたなかった
F 自分の発表内容への理解	よく内容を理解して発表した	だいたい理解して発表した	あまり理解できないまま発表した	まったく理解できず、ただ原稿を読みあげた

またこのルーブリックは、日本語の表現がやや簡単であることと、「3」が無いことが特徴的である。それは、例えば本事業で行った横浜市立みなと総合高等学校のドイツ語の授業（担当：池谷尚美）のパフォーマンス課題「自分の数年後の生活について語ろう」で使用された以下のワークシートと比較するとよく分かる。なお、こちらのパフォーマンス課題は質疑応答も行うため、「五領域」のうち「話すこと（やり取り）」と「話すこと（発表）」の両方を意識して作られている。

ループリック 該当する所に○をつけ、コメントを記入しましょう。				
評価 ()		記入者名 ()		
	努力しよう ☆	あと少し頑張ろう ☆☆	目標達成 ☆☆☆	目標以上を達成 ☆☆☆☆
表現の豊かさ	内容に応じた文型や語彙が選択されていない。	内容に応じてごく限られた文型や語彙が選択されている。	内容に応じて適切な文型を選び、適切な単語の選択ができています。	内容に応じて多彩な表現を使い、適切な単語を多く使用している。
音声（声の大きさ、発音の明瞭さ）	発音が不明瞭または声が小さいために、ほとんど聞き取れない。	明瞭さまたは声の大きさが足りずに聞き取れない部分が所々ある。	時々不明瞭な所はあるが、大体内容が聞き取れる声の大きさとゆっくりと話している。	十分な声の大きさで、はっきりゆっくり話している。
発表態度	発表メモばかり見て、全く聴き手のほうに意識が向いていない。	発表メモを見るものが多く、聴き手は時々しか見ていない。	発表メモを見ることはあるが、聴き手に頻繁に目を向け、語りかける姿勢や目線で話している。	発表メモにあまり頼らず、聴き手を絶えず意識した姿勢や目線で、聴き手に反応しながら話す。
スライド	写真等を使っているが、内容をあまり伝えられていない。	写真等を使い、文字の大きさや色の配置を工夫しているが、内容が伝わらない部分がある。	写真等を使い、文字の大きさや色の配置に工夫がある。発表内容を大体伝えている。	写真等を使い、文字の大きさや色の配置に工夫がある。発表内容を非常に効果的に伝えている。
質疑応答	質問を理解できず、答えられない。	質問が分かって、ドイツ語で答えられない。	質問に、ドイツ語の単語を並べたりして何とか答えている。	質問に、ドイツ語の簡単な文で答えられる。
その他コメント（工夫があった点、こうするともっと良くなるという点、感想など）				

神奈川県立翠嵐高等学校（定時制の課程）の単元指導案の「クラスの状況」には、「13名（日本語母語話者は約半数）」と記されている（付. 単元指導案の実際、(2) ケーススタディ・神奈川県立翠嵐高等学校（定時制の課程）韓国・朝鮮語における単元指導案」を参照）。ループリックの表現は、クラスに多数存在する非日本語母語話者に配慮し、あまり難しい語彙を用いないようにした結果である。「3」を無くしたのも同様の理由で、非日本語母語話者が「よく分からないのでまん中の評価にしよう」とならないよう工夫したものである。

ループリックの内容はこうしたクラスの状況のほか、パフォーマンス課題のテーマによっても異なってくる。以下は本事業で実施した慶應義塾高等学校のドイツ語の授業（担当：吉村創）で用いた、教員がウエーター、生徒が客に扮し、教科書の語句や表現を応用して、メニューを

注文した後「予測できない事態」にも対処するという設定のパフォーマンス課題「カフェでの会話」のルーブリックである^{xxiv}。

	目標以上達成	目標達成	もう少し頑張ろう	努力が必要
1	語句の発音や文の抑揚が完璧であり、聞き取るのにまったく問題ない	語句の発音や文の抑揚にあまり間違いがなく、聞き取るのにそれほど問題がない	語句の発音や文の抑揚に間違いがあるが、聞き取れないほどではない	語句の発音や文の抑揚に間違いが多く、聞き取りづらい
2	語句や表現を効果的に用いることができる	語句や表現を適切に用いることができる	用いる語句や表現が限られてはいるが、意図は伝わる	語句や表現を適切に用いることができず、意図が伝わらない
3	つかえたり止まったりすることがなく、流暢に会話を進めることができる	時々つかえたり止まったりはするが、概ね流暢に会話を進めることができる	つかえたり止まったりすることが目立つが、会話の流れを滞らせるほどではない	つかえたり止まったりすることが多く、会話の流れを滞らせる
4	予測できない場面において、適切な対応で問題を解決することができる	予測できない場面において、何とか問題を解決することができる	予測できない場面において、問題を解決しきれないが、何らかの対応はできる	予測できない場面において、対応できていない

3の「会話を進めることができるか」、4の「予測できない場面に対応できるか」という設定は、このパフォーマンス課題のテーマに基づいて設定したものである。また、「五領域」のうち「話すこと（やり取り）」に重点があることも分かるだろう。

このように、ルーブリックは固定した基準・文言があるわけではなく、クラスの状況やパフォーマンス課題に応じて常にカスタマイズする必要がある^{xxv}。

5. おわりに

本事業では、神奈川県・東京都下の公私立6中学校・高等学校における、韓国語・スペイン語・中国語・ドイツ語・フランス語の5言語の授業において、上記の方法を用いた授業実践を行った。その結果、そこで得られた知見をもとに、本事業の成果をより多くの関係者と広く共有していく見通しを得ることができた。また今後は、これを高等教育で応用する枠組を作ること、大学における外国語教育をより豊かなものとしていくこともできるだろう。

一方で、この方法はまだ多くの課題もある。例えば、複言語主義を意識するのであれば単元指導様式に「社会と文化の気づきのポイント」のような項目を、また逆向き設計に基づくのであれば「本質的な問い」と「永続的理解」についての項目を設ける必要がある。その場合はこの二つの要素が「育成すべき資質・能力の三つの柱」とどう関わるのかを検討し、全体の中に位置づける議論を行わなければならない。

また、令和4（2022）年度からの新学習指導要領の完全実施にあわせて改訂される、いわゆる「観点別評価」との整合性という問題もある。中でも、そこで「学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性の涵養」をどう実現するかについては、今後様々に研究して行かなければならないだろう。そうした点において、本稿で示した単元指導案様式はまだ開発途上にあり、今後さらに改善を行っていかなければならない。これらの課題は、中等教育の教員と高等教育の教員が協力する教育研究の「高大協働」によって一つ一つ解決していくことで、英語を含めた豊かな言語の学びを実現させることに繋がると考えている。

なお、本事業における授業実践の詳細については、別稿を参照されたい。

付. 単元指導案の実際

(1) 単元指導案様式

1. 単元名

--

2. 実施するクラスの状況等

言語／科目名		実施時期	
学習年次		言語レベル	
クラスの状況		単元の授業時数 (50分×3回など)	
単位数		使用教材	

3. 年間の目標

年間目標		
1年を通して育むべき資質・能力		
① 生きて働く知識・技能の習得	② 未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力の育成	③ 学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性の涵養
(音声、文字、語彙、表現、文法、言語の働きなどの細目を記述)		

4. 単元の目標

f：単元目標		
i：この単元で設定するパフォーマンス課題		
k：この単元で育むべき資質・能力（年間目標のうち、本単元で焦点化、重点化するもの）		
① 生きて働く知識・技能の習得	② 未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力の育成	③ 学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性の涵養
（この単元で参照する既習事項）		

(2) ケーススタディ・神奈川県立翠嵐高等学校（定時制の課程）韓国・朝鮮語における単元指導案

1. 単元名

ルーツの言語・方言を紹介しよう

2. 実施するクラスの状況等

言語／科目名	韓国語／韓国朝鮮語 I	実施時期	11月～12月
学習年次	2～4年次	言語レベル	A1
クラスの状況	13名 (日本語母語話者は約半数)	単元の授業時数 (50分×3回など)	45分×5回程度
単位数	2単位	使用教材	『高校生のための韓国朝鮮語新・好きやねんハングル I』 白帝社

3. 年間の目標

年間目標		
<p>授業を通して韓国語や韓国文化に関心を深めることができるようにする。 自己紹介、買い物、食事、趣味等身近な場面において、同年代の韓国語母語話者と一言でもよいので韓国語でやりとりできるようにする。 韓国語にとどまらず、自身の母語や方言、日本語にも関心を持てるようにする。</p>		
1年を通して育むべき資質・能力		
① 生きて働く知識・技能の習得	② 未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力の育成	③ 学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性の涵養
<p>韓国語の発音に慣れ、定型文やよく使うフレーズを覚える。 グループ語（スポーツ名、料理名、趣味名、果物名、野菜名、動物名、植物名等）や身近な語等、使える語彙を増やせるようにする。 漢字語数詞、固有語数詞に慣れ、使用する。</p>	<p>相手が何を表現しているのか、何を言いたいのか理解し、一言二言でもよいので自らも発信できるようにする。 日本語とは異なる韓国語独特の語彙、意味、文法等に気づき使えるようにする。 以下例示。</p>	<p>日本語や自分の母語・方言と比較対照しながら、韓国語との共通点や違いについて考察を深めることができる。以下は例示である。</p>
<p>（音声、文字、語彙、表現、文法、言語の働きなどの細目を記述） 「アンニョンハセヨ」「カムサハムニダ」「○○へ行きたいです。」「○○で何を食べたいですか」等日本語の助詞「が」「は」「を」「に」「で」に相当する助詞、「です」「ですか」に相当する語尾等</p>	<p>a 助詞の使い方（助詞を省略できるケースも含め）…日韓共通のもの、相違するもの。 b 「ある／いる、ない／いない」の日本語と韓国語の違い等</p> <p>上記以外にも、日本語との共通点、相違点を意識して韓国語を使用できるようにする。</p>	<p>a 日韓の漢字文化のあり方について考えることができる。 例 漢字を用いるが日韓で意味が異なる語。勉強／工夫 等</p> <p>b 言語の背景にある文化や社会のあり方について考えることができる。 例1 日韓の敬語の違い 例2 歴史的なことがらとの関連 サツマイモ／コグマ 例3 文化的共通点への着目 トルチャンチ</p>

4. 単元の目標

単元目標		
① 生徒自ら課題「ルーツの言語・方言を紹介しよう」にとりくみ、既習の文法項目や定型文、語彙を使いながら文を作ることができる。 ② 大きな声やジェスチャー、絵や写真等視覚に訴えるものを使用し、他の生徒にわかるよう発表することができる。 ③ 他の生徒の発表内容を聞き、理解することができるようにする。 ④ 韓国語や日本語のほか、これら以外の言語や方言について関心を拡大することができるようにする。		
この単元で設定するパフォーマンス課題		
ルーツの言語・方言を紹介しよう。各自好きなことば、フレーズについて3語選び、二人一組でルーツの言語（方言）、韓国語、日本語の意味を短文のやりとり形式で紹介する。		
この単元で育むべき資質・能力（年間目標のうち、本単元で焦点化、重点化するもの）		
① 生きて働く知識・技能の習得	② 未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力の育成	③ 学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性の涵養
韓国語の発音に慣れ、始めと終わりの挨拶、定型文やよく使うフレーズを覚える。 「タガログ語」「中国語」「韓国語」等の語や自分が選んだ語を韓国語で正しく発音することができる。	相手が何を表現しているのか、何を言いたいのか理解し、一言二言でもよいので自らも発信できるようにする。 「○○は韓国語で何といいますか」「○○といいます」等のやりとりを適切に言えるようにする。	韓国語と日本語の文法が似ていること、似つつも異なる点があることに気づく。 漢字語の音声は日本語と韓国語で似ているもの、そうではないものに気づく。
(この単元で参照する既習事項)		

参考文献

※ Web サイトはいずれも2021年3月12日閲覧確認

- 英語教育の在り方に関する有識者会議 2014 「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告 ～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」、平成26年9月26日、https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/1352460.htm
- ウィギンズ, G./マクタイ, J. (著)・西岡加名恵 (訳) 2012 『理解をもたらすカリキュラム設計』、日本標準、2012年
- 教育再生実行会議 2013 「これからの大学教育等の在り方について (第三次提言)」、2013年5月28日、https://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaicei/pdf/dai3_1.pdf
- 教育出版株式会社 2017 「中学校外国語」学習指導要領新旧対照表、2017年5月16日、https://www.kyoiku-shuppan.co.jp/textbook/chuu/eigo/files/cos17_btv01.pdf
- 公益財団法人国際文化フォーラム (TJF) 2013 『外国語学習のめやす 高等学校の中国語と韓国語教育からの提言』、公益財団法人国際文化フォーラム (TJF)、2013年
- 奈須正裕 2017 『「資質・能力」と学びのメカニズム』、東洋館出版社、2017年
- 西岡加名恵 (編) 2008 『「逆向き設計」で確かな学力を保障する』、明治図書、2008年
- 西岡加名恵・田中耕治 (編著) 2009 『「活用する力」を育てる授業と評価』、学事出版、2009年
- 西岡加名恵 2016 「資質・能力」を育てるパフォーマンス評価 アクティブ・ラーニングをどう充実させるか、明治図書出版、2016年
- 平成29年度外国語強化地域拠点事業 (慶應義塾大学) 2018 平成29年度外国語強化地域拠点事業 (慶應義塾大学) 成果報告書、2018年、<http://user.keio.ac.jp/~yamashita/gaikokugokyoten/>
- 平成30年度グローバル化に対応した外国語教育推進事業 (慶應義塾大学) 2019 平成30年度グローバル化に対応した外国語教育推進事業 (慶應義塾大学) 成果報告書、2019年、<http://user.keio.ac.jp/~yamashita/gaikokugokyoten/>
- 文部科学省 2013-1 「教育振興基本計画」、平成25年6月14日、https://www.mext.go.jp/a_menu/keikaku/detail/_icsFiles/afieldfile/2013/06/14/1336379_02_1.pdf
- 文部科学省 2013-2 「新しい学習指導要領の考え方—中央教育審議会における議論から改訂そして実施へ—」、平成25年9月28日、https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/_icsFiles/afieldfile/2017/09/28/1396716_1.pdf
- 文部科学省 2013-3 「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」、平成25年12月13日、https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1343704.htm
- 文部科学省 2014 「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会—論点整理—」、平成26年3月31日、https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2014/07/22/1346335_02.pdf
- 文部科学省 2015 「英語教育強化地域拠点事業公募要領」、平成26年2月5日初等中等教育局長決定・平成27年1月16日改正、https://www.cao.go.jp/bunken-suishin/doc/tb_h26fu_10_mext427a.pdf
- 中央教育審議会 2016 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について (答申)」、平成28年12月21日、https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf

- 文部科学省 2016 「学習指導要領改訂の方向性（案）」、平成28年6月21日、https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/061/siryu/_icsFiles/afieldfile/2016/07/07/1373849_1.pdf
- 文部科学省 2017 「新しい学習指導要領の考え方—中央教育審議会における議論から改訂そして実施へ—」、2017年9月28日、https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/_icsFiles/afieldfile/2017/09/28/1396716_1.pdf
- 文部科学省 2018 『高等学校学習指導要領（平成30年告示）』、平成30年3月告示、https://www.mext.go.jp/content/1384661_6_1_3.pdf
- 山崎吉朗 2016-1 「声をあげる～文部科学省、東京都への提案、要望」、『複言語・多言語教育研究』No.3、2016年、pp.107-127
- 山崎吉朗 2016-2 「変革の兆し」、『複言語・多言語教育研究』No.4、2016年、pp.169-174
- 山崎吉朗／水口景子 2017 「政策を動かす—文部省、東京都への要望」、『複言語・多言語教育研究』No.5、2017年、pp.112-117
- 吉村創／矢田部清美／境一三 2019 「高等学校ドイツ語授業におけるパフォーマンス課題の実践報告」、『慶應義塾外国語教育研究』16、2019年、pp.73-93
- 令和元年度グローバル化に対応した外国語教育推進事業（慶應義塾大学）2020 令和元年度グローバル化に対応した外国語教育推進事業（慶應義塾大学）成果報告書、2020年、<http://user.keio.ac.jp/~yamashita/gaikokugokyoten/>

注

- ⁱ 教育再生実行会議2013。
- ⁱⁱ 文部科学省2013-1。
- ⁱⁱⁱ 文部科学省2013-3。
- ^{iv} 英語教育の在り方に関する有識者会議2014。
- ^v 文部科学省2015。なお読点は「、」から「、」に改めた。
- ^{vi} 中央教育審議会2016、pp.199-200。なお読点は「、」から「、」に改めた。
- ^{vii} なお事業化にあたっては、一般社団法人日本外国語教育推進機構（JACTFL）から文部科学省への働きかけがあった。山崎吉朗2016-1、山崎吉朗2016-2、山崎吉朗・水口景子2017を参照。
- ^{viii} なお平成29年度「外国語強化地域拠点事業」、平成30年度・平成31年度「グローバル化に対応した外国語教育推進事業」については、平成29年度外国語強化地域拠点事業（慶應義塾大学）2018、平成30年度グローバル化に対応した外国語教育推進事業（慶應義塾大学）2019、令和元年度グローバル化に対応した外国語教育推進事業（慶應義塾大学）2020を参照。
- ^{ix} 文部科学省2018、pp.19-20。なお読点は「、」から「、」に改めた。
- ^x 奈須正裕2017、p.26およびp.36。
- ^{xi} 文部科学省2018、p.475。なお読点は「、」から「、」に改めた。
- ^{xii} 文部科学省2016、p.1。なお文部科学省2017、p.12など、同一の表現は文部科学省の様々な資料でも見られる。

- xiii 文部科学省2016、p.2。なお読点は「,」から「、」に改めた。
- xiv 奈須正裕2017、pp.40-41。文部科学省2014、pp.23-29。中央教育審議会2016、p.15。
- xv 奈須正裕2017、p.42。
- xvi 教育出版株式会社2017、p.1。なお読点は「,」から「、」に改めた。
- xvii 読点は「,」から「、」に改めた。
- xviii 西岡・田中2009、p.8。
- xix ウィギンズ／マクタイ2012。
- xx 公益財団法人国際文化フォーラム2013。なお、本事業運営指導委員の山下誠・水口景子も当該書籍の作成プロジェクトメンバーとして参加している。
- xxi 韓国・朝鮮語以外の例については、本プロジェクトメンバーによる本誌掲載の別稿を参照されたい。
- xxii 本表は、句読点の不統一も含め、授業担当者が実際に使用したものをそのまま掲載している。
- xxiii 本表は、句読点の不統一も含め、授業担当者が実際に使用したものをそのまま掲載している。
- xxiv なお、当該研究担当者が以前行ったパフォーマンス課題については、吉村・矢田部・境2019を参照されたい。
- xxv ルーブリックの作成については、西岡2016なども参照されたい。